



著 藤原 報國 爲 編
初編
二冊



A412

久坂氏ハ長州の藩士より実名と義助との英智卓量
事考七回並ふ専ら力を尽し既に文久癸亥の春



事の因循を以て患ひ肥後藩真武兵衛等と
俱に岡白近衛殿に詣りて頼りて攘夷の期限を

福原越後等三家老と俱に兵士等を引俱して天王山に屯る

願書をさし出せど御採用更よく壮士の面々憤激

禁閣は逼らんとし玄瑞事の成らざるを成知り

一隊の兵を率へて馳趨鷹司の邸に據り姑く官兵と戦ひ
たりしが遂に焼撃せらるるに至り勢ひ衰へ窮るるに火
中は自殺せり

後月一



48-7624

有村治左衛門

有村氏の薩州の藩目下部伊三次

の甥ゆき

水戸の重臣

安島帯刀

縁者

余ハ安政

戊午の年

伊三次

及び帯刀

等罪あり



行支も慥にさうん此所まで

△首をとる

△衛士の

の首

級あり

又

有村深く憤り佐野竹之介等

十七名と竊み示合ひ彦根中ねど

怨えん此人の若年を頗る

剣法ふ達者故に此頃門弟數多し

仍て弟子中の寄合と披露一萬延元年

三月三日品川駅ある其の酒樓小同志の面々

會合る一爰を最期の盃を交へ次の日の

拂曉小愛宕山小勢揃へて桜田外に出張

元老を根元の登城と俟て同襲撃す及び

ワ接戦の事も烈しかりし遂に本懐とゆるふ

いさ有村ツの首級を携へ辰の口まで走りたれ其躬み數ヶ所の重傷と

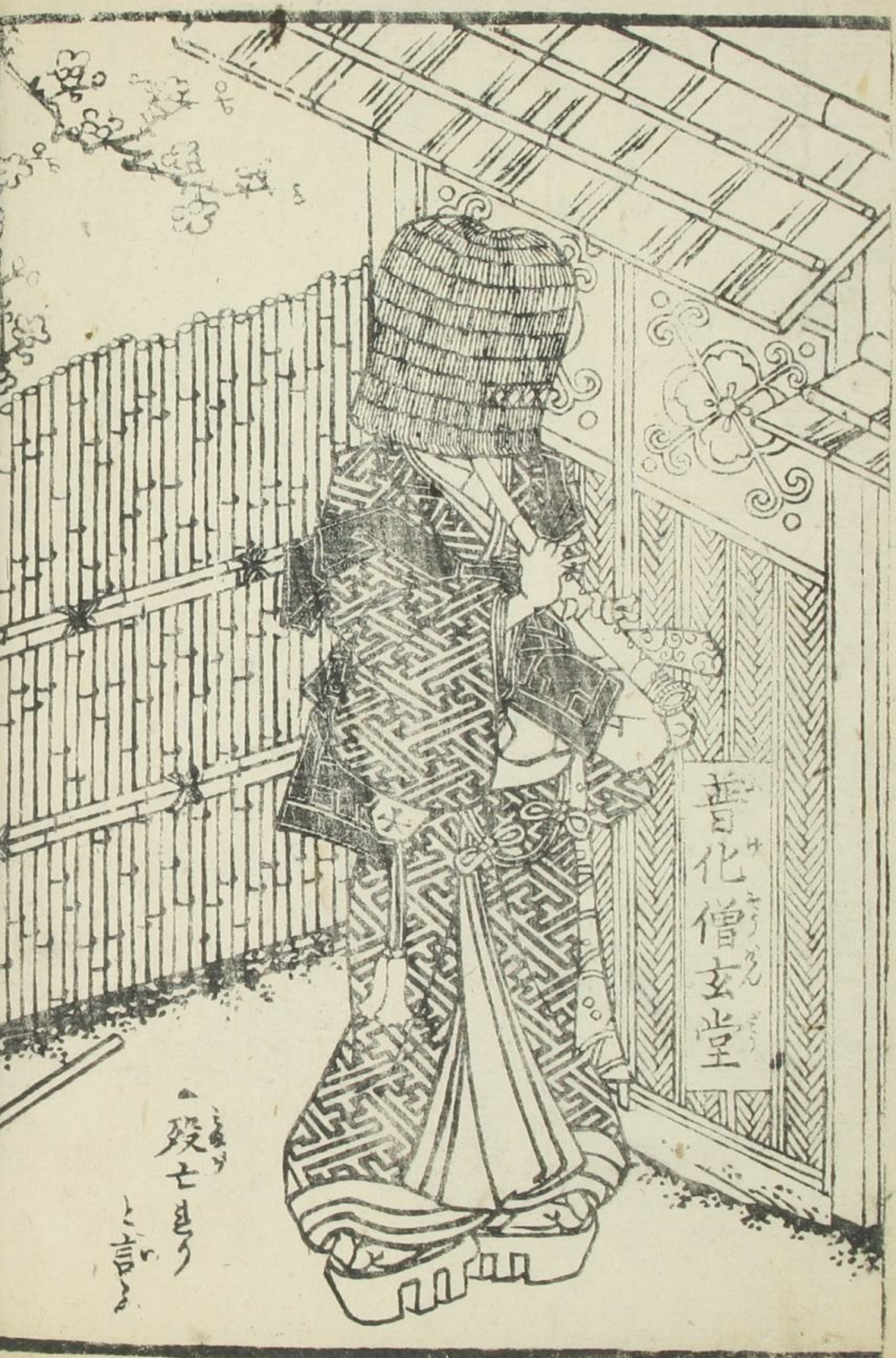


自殺せり渠が推考へ

たる首は眞の元

老あり

一七五



殺亡也



玄堂ハ元長州の藩士
 多の故りゆく出国一所々
 遍歴を倣いつつ中項普化宗み入て
 僧となり遂に京師大佛多妙園寺
 の住侶然るも元治甲子の年長州
 の二家老等京師乱入為されども其の戦ひ
 利りも一に敗走を為さゆり玄堂固より美乳
 あるも長州の敗兵を竊るも菴室に匿せしむる
 幕吏等と疑ひ捕を獄に下せし後幸に出牢し
 難を遁るも後海なれど慶応丁卯の秋より浪花よるの之

来島亦兵衛



来島氏

長州の藩

して最も無類

の荒者あり元治甲子の京乱に至り

嵯峨天竜寺に屯集し則ち此手の

隊長より既し兵を交ゆや官軍四方を

取囲む難戦數ヶ度及べども亦兵衛

さうし臆まざる騎かく百騎一騎より

さても會津の首を得ざるうち

りる者共と指揮し遂に禁門を

攻め大の官兵を悩ませしが薩州

勢より打掛けたるのも烈し

鉄炮は眩をうち抜れ鬼と喚る

一又兵五も倦る

深穢に堪りし

馬より肩と

落あぐらも

我首敵に

渡り

とて自り咽を

突串くみぞ其甥

北村金吾なる者

乱軍のうちみ

馳来り来島

首級を隠

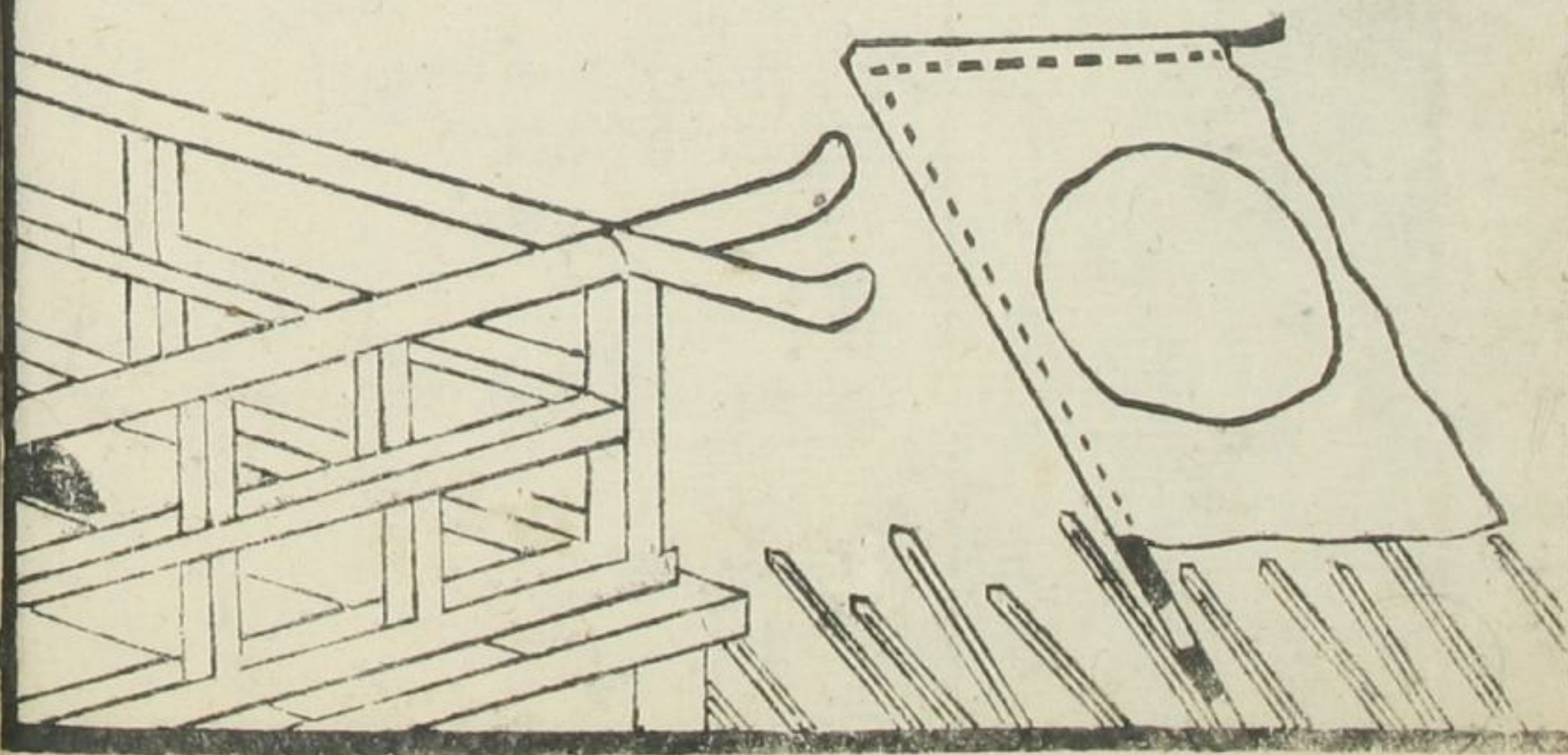
平野次郎

平野氏ハ福岡の藩士一
 名を国臣と稱す此人尊攘
 の志厚く国事の爲に苦慮
 せし衆に超り安政
 五年京師に登り有志
 の輩と同盟を結ぶ其
 を奉んと謀り一ふまを
 九州の間を姿を削り名を
 麦とく頻りふ遍歴するも



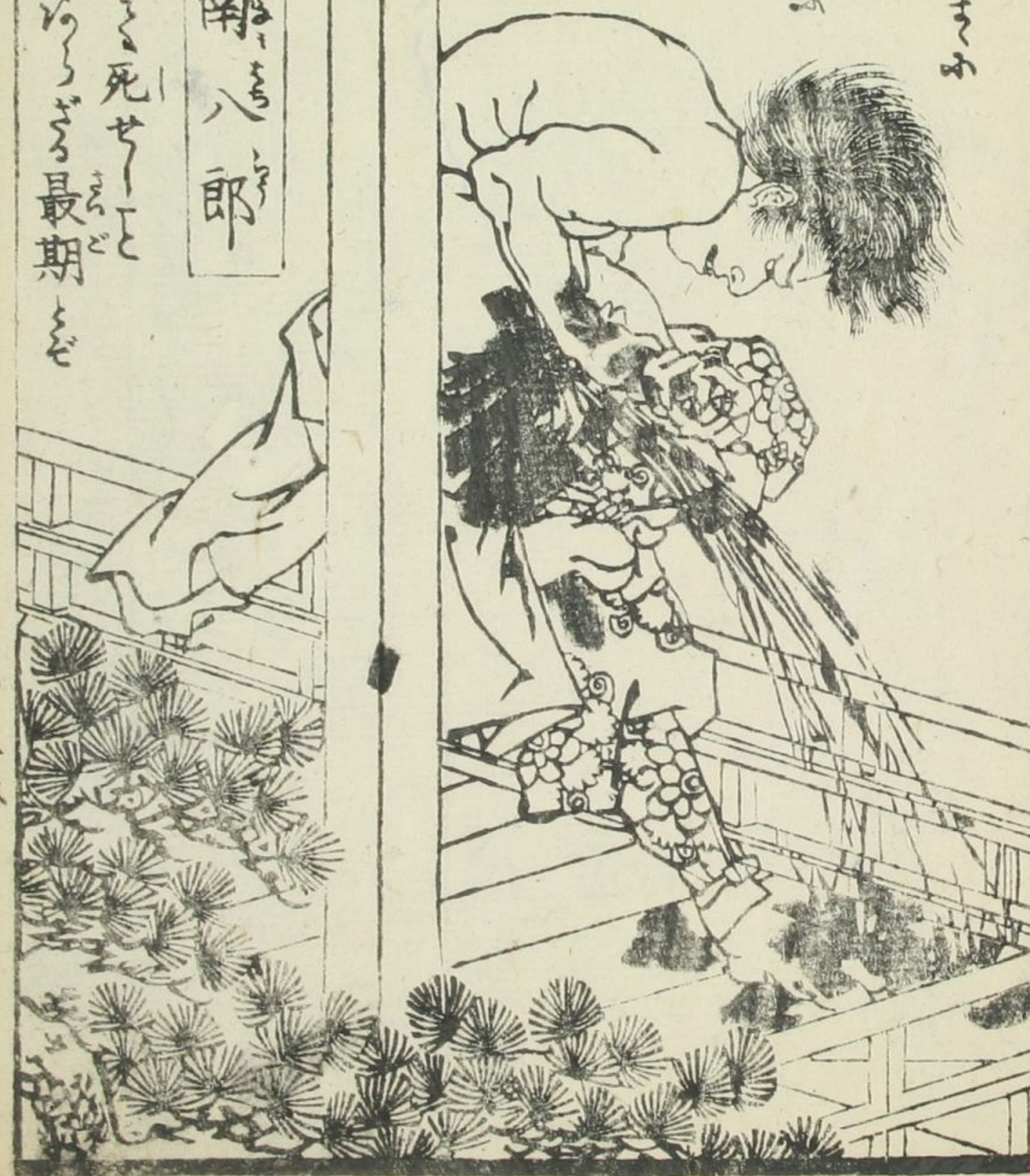
専ら同憂の者み會し既薩州に赴くと茲みつるに前後四回初めは島津
 泉州主と宿意を言上するところを其志を通ずるを以て後次郎は救百
 名の有志を擔ひ就て京師に走上る幕府の罪を諱るその三策の
 書を奉り一その策最も高論ありや爰におもく平野が名大つて天
 下を動かし然るに藩王黒田侯次郎の所為を駭かれ捕へて禁錮
 せしむるに三策遂に行われず斯く文久癸亥の年 朝廷次郎
 を京師に召し学習院の督長を命じ幾許もあらずに朝
 議の変わるにありて幕吏等次郎を捕へんとは仍も平野と
 京師を走り澤脚をもちて但州生野銀山より天下の士
 気を鼓舞せんとせし幕兵四方に逼りて戦ひ利ありたるよ
 り翌年の素懐を遂るるにその場は臨み捕へられ翌年
 終に死に就り

南氏も長藩より本名川上弥市と喚ぶを
 猛勇激烈の士あり癸亥の年平野なる者
 長州より来り美玉三平等甲乙と闘り
 其頃長州は居田せり澤脚を
 主將となし但州生野は出張し支隊起
 さんともなり至り南もその黨は知はる
 抑生野は事と挙るや既中山忠光
 卿の大和は兵を挙げり勢ひ盛ん
 听ゆれを這方も但馬は兵を起し中山卿と應接
 あり京師は逼りて奸吏を斥け攘夷の
 大義を計りんとせし大和の義徒等敗潰
 せり大和の力を落したるは幕兵四方
 田一のり土人等も起りたり

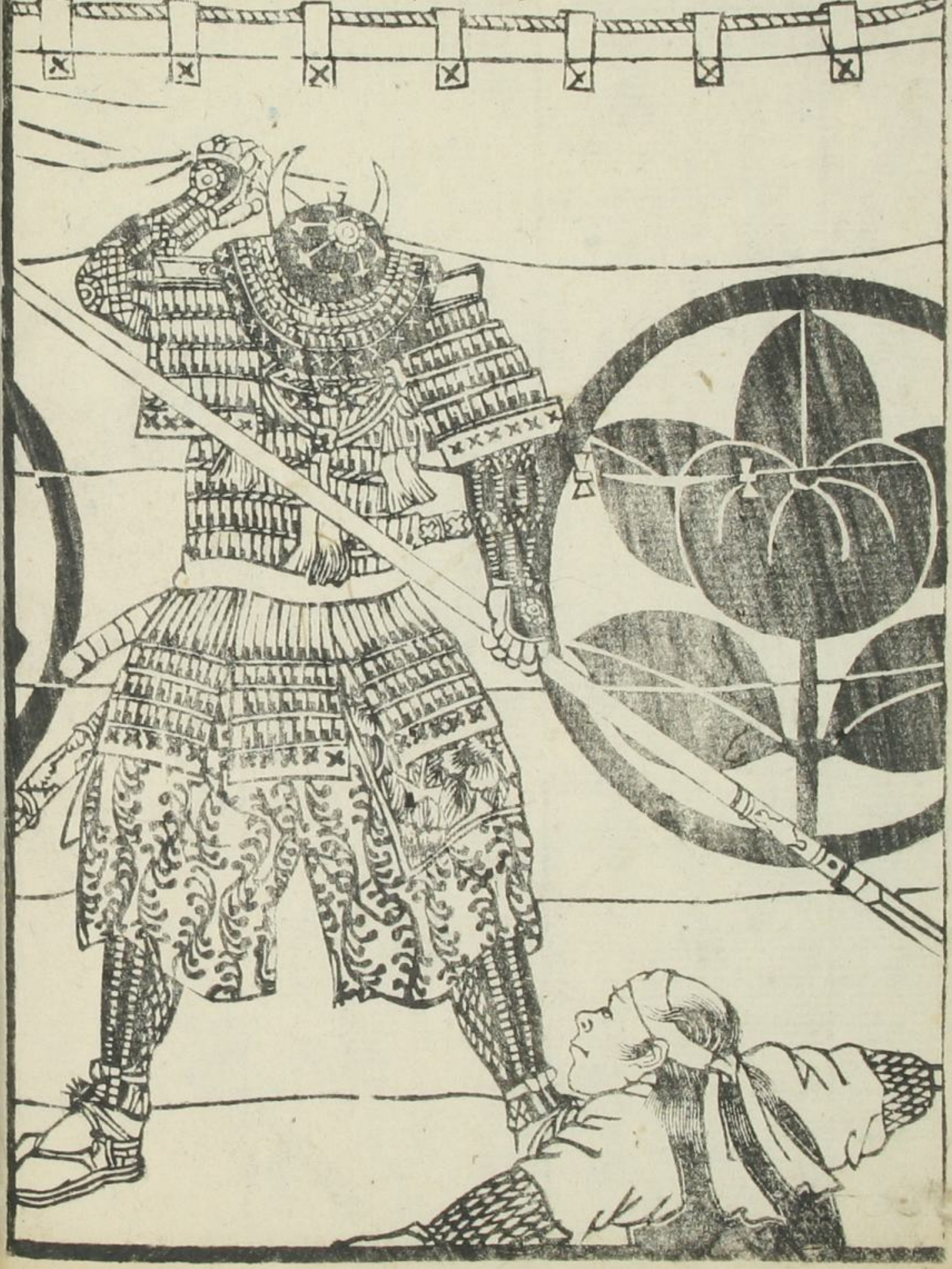


防ぐ小術のあらまふ
 沢脚もあつて退去
 南氏の妙見山は
 楯籠りと更
 一歩もあつ
 ぞろぞ同盟
 十一人と
 人錯
 る其身ゆ
 腹をく
 割き自ら首刎る死せりと
 比類ゆらざる最期を

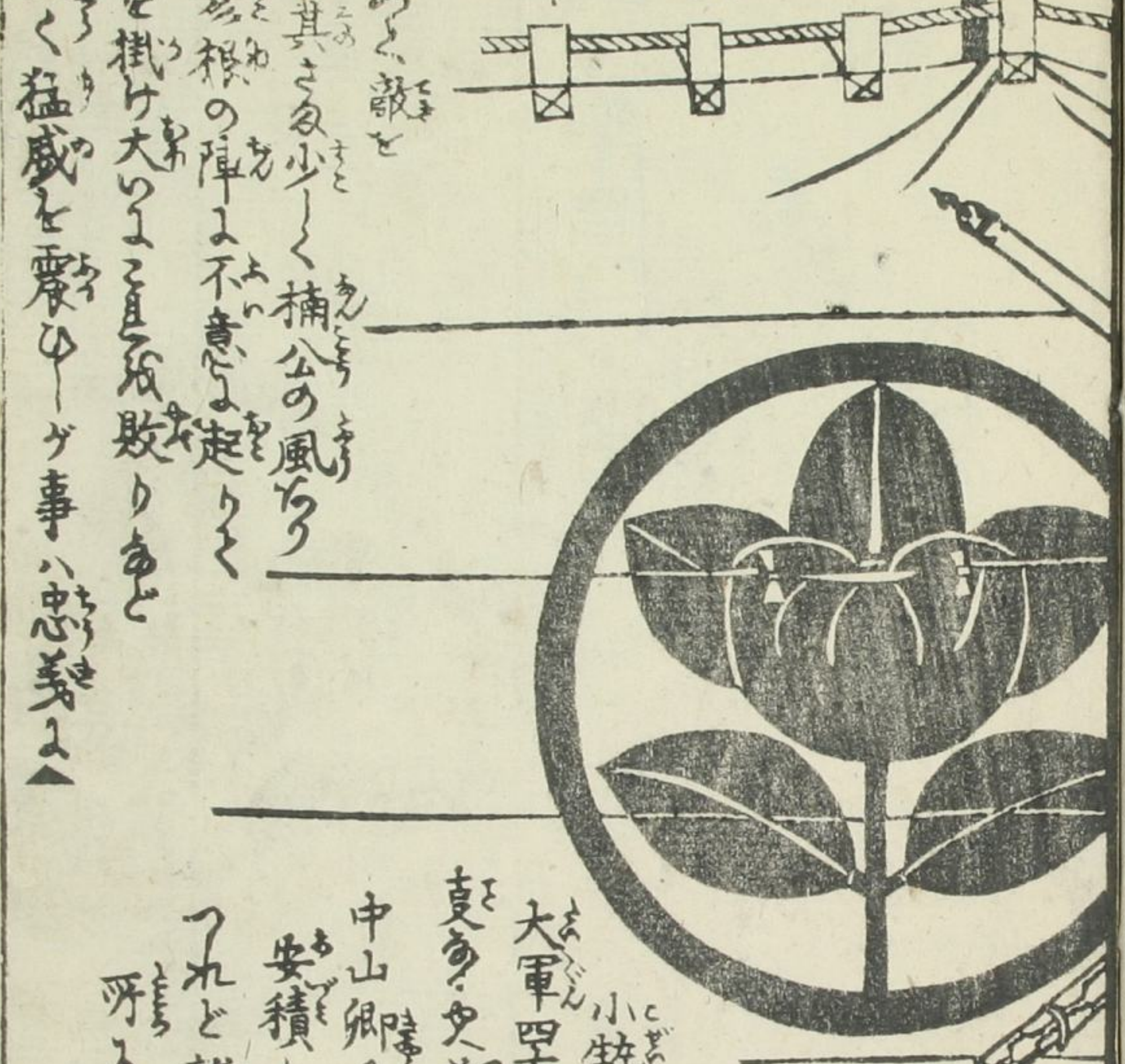
南八郎



安積氏ハ江戸の人
武直ハと
稱一頼
智謀
癸亥の秋
中山忠光
卿兵と
大和
拳るよ
武直



軍師
能く兵
工等と
指揮
奇
言をりつと敵と
悩ま其さ少く捕公の風ら
就中茲根の陣よ不意よ起り
夜撃を掛け大りよ直敗り
しく姑く猛威を震ひ一ヶ事ハ忠義よ



安積五郎

▲起るといふもの
固より鳥合の
小勢あるは実可手の
大軍四方より攻蒐りしる
夏あ夕遂に勢ひ窮まりて
中山卿より退去せられ
安積も甚く苦き
つれと就鳥家口といふ
所より敵の擒と
ありと言ふ

武田氏より水府の宿老ふりて

伊賀守たり固より

正義の士あるが

故に烈公及び

當中細言殿は

あつても

大のふ

こゝを

登用せ

らして

時より元治甲子の

年彼の藤田小四郎等

筑波山は楯籠り



武田耕雲齋

幕府の兵を引受て戦ひ最中あるより水府藩の奸黨等此虚より
 衆ト勢ひをばく国に残り正義の徒を或は捕て幽閉し又ハ
 後義を介け一は正義の面々憤りて此旨主人に訴へんと三百余人水
 戸を脱し江戸の方へとらざり下總の国小金に至り此を武田ハ
 江戸に在り渠等を鎮めんを請ふ仍て幕府の沙汰とて水府
 の支藩松平大頼頭は耕雲齋を属せし鎮撫の命を下せしを別ち
 武田等小金に至り三百余人を引連て水戸に入るとする程は奸
 徒等途に兵を出し支へて城に入るとは故是より双方接戦あり
 遂に那珂湊とりのま據りて奸徒の兵を悩ませし藤田
 も未り加はりて一時軍威を震ひし奸徒も幕吏に議を
 合せ諸藩の兵を攻めりて武田も勝算ありを知らし上ハ
 京師より事の曲直を訴へんと稍近江の国海津まで兵を引俱に赴き
 一が本意を遂るては城は幕吏の為に斬らるる不及なり

伊藤氏 松本藩 高輪 東禅寺 在英人の旅 館



松本侯をして
其警備を命づらるれば
伊藤も主命止をば
是が衛士と成りつと心中
甚ど快く天下の一諸侯と
外国人の守衛を故まて前古未曾有の
珍事ありと常に慨きん為れども又
註術もゆきざれる然る懸念は取扱ひ
し英人却りて我意は誇り屢衛士よ
无礼をあるぞ軍兵衛遂に堪くも
文久二年六月朔日稍曉及ふ頃
彼の寺の庭前より英人二名を殺害
其館の小屋に立飯り遺書一通

伊藤軍兵衛

認めおき
割腹をせん
為たりとを

松陰を長藩より通称と寅次郎
 との、亜米利加より渡来せしむ
 洋行を倣さんとして事ありむ久し
 其藩に禁獄さるると憂国の念
 まましく已まざる然るふ

吉田松陰

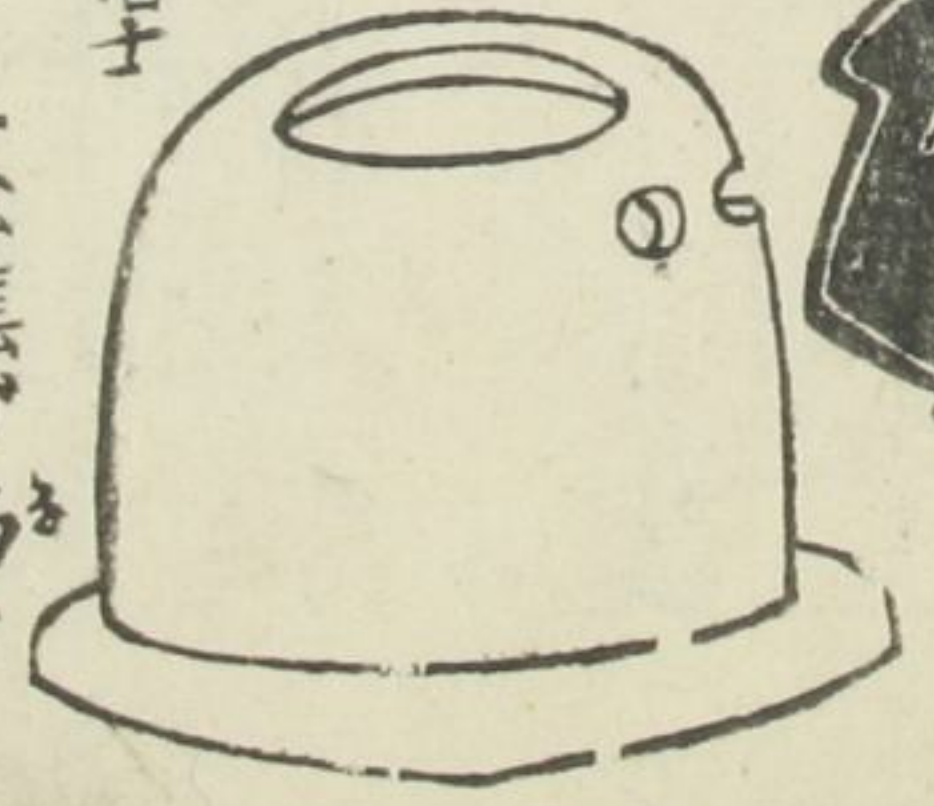
彦根家政事と
 執り親藩離れ
 畔ふのり幕府と
 佐けざれを知り

大原三位卿の
 書を呈下攘夷の
 説を起えんとせり其頃閣老
 鯖江侍従卒ふ京師より上りて



駭く事限りあり然る
 ことにて刑は處
 せり

正義の廷臣は幽閉し无罪の
 有志を捕らると聞き松陰憤りふ
 堪やむを窮ふ刺客を京師よりつり
 侍従を暗殺せんとせり其計策調
 書を折る何者の所為や名を匿せ



梅田源次郎と云人長州に遊ばると藩士
 等彼と密謀を企んとせり時へは是も松陰が為
 梅田が長州へ未見の項に松陰の禁獄中又密談さんど
 老の暗殺を企んと圍り首を憚る色も陳る幕吏等意外の事を言わ

010190519045

齊昭卿之水戸の藩主

諡烈公

贈大納言齊昭卿

英敏卓見

國家に力せり

更も世俗のよ

知所あるに其

傳説と備ふ事

始め軍備を調へんと彼の

藤田等と命ト領内の梵鐘と

潰し兵器を鑄造せしめ詠

の秀逸の因は茲に記す

の優美を賞むるの



今よりハ

心長雨

花と見ん

夕暮つと

鐘

あけれハ

二景清一代記

佐倉宗吾一代記

白石翁一代記

宮本武藏一代記

清盛一代記

小栗判官一代記

日蓮上人一代記

伊賀忍術一代記

散元 九屋 小林 鉄次郎

